

平成 13 年 11 月 21 日

## 狂牛病 (No.3)

営業部 学術担当

### BSE 国内二頭めの発症か？

本日 21 日、厚生労働省は「第二回 BSE の検査に係わる専門家会議の開催通知」を出しました。

先月 18 日から狂牛病検査が開始され、一次検査陽性で二次検査を帯広畜産大学で行ったところ、二次検査も陽性判定が下された為、専門家会議が召集されたものです。

この件は既に弊社「狂牛病 2」(平成 13 年 10 月 23 日付)でお知らせいたしましたとおり、汚染された牛骨粉(イギリスから輸入された物)を飼料として与えられていた牛で、9 月発病確認直後 366 トンの汚染 MBM(濃厚飼料)を与えていた牛は 9 5 0 0 頭余りとなっていました。当初この頭数であれば、イギリスの疫学調査による最大 3% の発生率から予想される日本での BSE の牛感染は、2 8 5 頭が発生しても可笑しく有りません。その後の汚染牛骨粉の輸入は 166 トンに下方修正され、それを与えられていた牛は 1 5 道県 1 6 5 農家 5 1 2 9 頭と判明しました。最大 3% 発生率からすれば、1 5 3 頭発生しても可笑しくありません。

今回専門家会議で検討する陽性の牛は、雌・ホルスタイン・月齢 67 ヶ月です。

「狂牛病 2」でお知らせいたしました条件月齢 30 ヶ月以上・乳牛イギリスの疫学パターンの範囲内でした。

汚染された MBM を食べさせられた牛だけが発症するのです。これを食べていなければ BSE は発症しません。しかしながら天然物を扱う私どもは、自然の摂理で草食動物は草を食べさせてこそ自然界の調和ハーモナイゼーションは守られるのです。漢方薬・自然治癒力の啓蒙をする又と無いチャンスだと思います。

平成 13 年 10 月 25 日  
生産局畜産部飼料課

肉骨粉等を含む飼料の牛への給与について（第 15 報）

1. 10 月 15 日現在、都道府県が行ったプレスリリースから把握した肉骨粉等を使用していた農家は、25 道府県で 219 戸（9,590 頭）であった。
  2. しかしながら、  
肉骨粉等の中には、骨炭のように、高温処理されており感染リスクが無視できると BSE 技術検討会（座長東京大学小野寺教授）で判断されたものがあり、これを除外することが適切であること  
道府県が集計した曹数の中には、肉骨粉等を給与した頭数ではなく、単なる飼養頭数を記載しているところがあることから、実際に給与し又は給与したことが否定できない頭数に統一する必要があること
- を踏まえ精査した結果、肉骨粉等を給与した農家戸数及び頭数は、15 道県、165 戸、5,129 頭となった。

問い合わせ先  
生産局畜産部飼料課  
担当者：凍本、野崎、相田  
電話：03 - 3502 - 8111  
（内線 4003, 4004, 3999）  
直通：03-3501-3779、3778

別紙

肉骨粉等を給与した農家戸数、頭数について

都道府県	農家戸数	給与した頭数又は給与が否定できない頭数			
		肉骨粉	蒸製骨粉	血粉	計
北海道	19	1,329		252	1,581
岩手県	2	4		46	50
宮城県	12			1,095	1,095
山形県	1	118			118
茨城県	2	5	18		23
栃木県	12		431		431
群馬県	1		21		21
埼玉県	3		94		94
千葉県	81		760	228	988
長野県	3		20	22	42
静岡県	13			331	331
新潟県	4			87	87
愛知県	4	35		98	133
広島県	1	1			1
熊本県	7	4		130	134
合計	165	1,496	1,344	2,289	5,129

資料：都道府県の調査結果

注1) 頭数については、現在飼養されている頭数である。

注2) 蒸製骨粉とは、動物の生骨を加圧蒸解し、乾燥・粉砕したものをいう。

注3) 血粉とは、家畜の血液を加熱凝固し、水分を除去した後、乾燥・粉末化したものをいう。

## 狂牛病 2 頭目が北海道で発見

国内 2 頭目の狂牛病（牛海面状脳症）の牛が 21 日、北海道で見つかった。北海道猿払（さるふつ）村の農場で生まれ、同じ農場で飼育されていたメスのホルスタインで、全頭検査の 1、2 次検査とも陽性と判定された。肉や内臓は出荷されておらず、焼却処分になる。厚生労働省と農林水産省が先月 18 日に出した「安全宣言」から約 1 カ月。水面下の感染が懸念され、両省に対する責任追及の声がさらに強まりそうだ。

厚労省が発表した国内 2 頭目の狂牛病の牛は、同省や北海道によると生後 5 歳 7 カ月のメスのホルスタイン。北海道北部の猿払村の酪農家から 19 日、天塩町の道北食肉センターに持ち込まれ解体された。北海道留萌保健所管内で行われた「エライザ法」という 1 次検査で擬陽性になり、21 日、帯広畜産大で精度の高い「ウエスタンプロット法」という 2 次検査でも陽性の結果が出た。同省は同日午後 5 時から省内で専門家会議（座長・品川森一帯広畜産大教授）を開き、正式に確定診断した。ただ牧場や解体時の獣医師らによる生体検査では起立障害などの狂牛病特有の神経症状はみられず「異常なし」と報告されていた。品川教授は「あと数カ月で発症していたと思われる」と話した。

厚労省は感染が発覚した牛の肉や内臓などすべてが出荷されていないことも確認しているとしており、焼却処分にする。この牛は 3 頭の牛を産んだが、子牛の行方は分かっていない。

農水省は 1 頭目と 2 頭目の牛が生まれたのがいずれも 1996 年春で、場所も北海道内のため、飼料や飼育状況などに共通点が出てくれば感染源の特定につながる可能性もあるとみている。

品川教授は「英国など欧州の感染牛でつくられた肉骨粉が感染原因の可能性が高い」との見方を示した。

出荷した酪農家は計 79 頭の乳牛を飼育。狂牛病の感染源とされる肉骨粉を与えていたとの報告はないという。農家は処理場に 2 頭を持ち込んだが、もう 1 頭は陰性だった。同省はこの酪農家のすべての乳牛に加え、同処理場でこの牛の後に解体された約 30 頭の出荷・流通を停止した。残る 77 頭すべての検査を実施した上で、焼却処分する方針だ。

厚労省は 10 月 18 日から全国の食肉衛生検査所で、食肉処理される年間約 130 万頭すべての牛を対象にした全頭検査を実施。今月 20 日までに約 8 万 8000 頭を検査した。厚労、農水両省の大臣は同日牛肉の安全宣言を出したが、約 1 カ月後、2 頭目が出てしまった。狂牛病が最初に発生した欧州で社会問題となる中「日本は安全性が高い」と主張し、十分な対策を怠ってきた農水、厚労省に対する責任追及の動きもさらに強まりそうだ。

感染牛の生産者、肉骨粉使用せず？

(11/22 nikkansports.com より)

厚生労働省は二十一日、狂牛病（牛海綿状脳症）の全頭検査で国内二頭目の狂牛病の牛が北海道で見つかったと発表した。同省は同日午後五時から省内で確定診断のため専門家会議（座長・品川森一帯広畜産大教授）開き、最終的に狂牛病であることを確認した。

厚労省は二頭目の内臓や肉などすべてが流通していないことを確認しており、焼却する。

全頭検査が始まって約一カ月。感染の広がりが懸念され、消費者の不安が一層高まるのは必至。欧州で狂牛病が大きな社会問題となる中「日本は安全性が高い」と主張し十分な対策を怠ってきた農水、厚労両省に対する責任追及の動きもさらに強まりそうだ。

厚労省などによると、牛は雌のホルスタインで、生後六十七カ月。北海道猿払村の農場で生産され十九日、天塩町の道北食肉センターに持ち込まれ解体。北海道留萌保健所管内の一次検査で疑陽性になり、二十一日、帯広畜産大での精度の高い確認検査で陽性の結果が出た。一次検査では限界値を上回るほどの強い陽性反応を示したが、神経症状は出ていなかったという。

出荷した酪農家は約七十頭の乳牛を飼育。狂牛病の感染源とされる肉骨粉を与えていたとの報告はないという。農家は処理場に二頭を持ち込んだが、もう一頭は陰性だった。

農水省と北海道は、この酪農家のすべての乳牛と、同処理場でこの牛の後に解体された三十頭の出荷を停止した。農水省が感染ルートの調査を進める。

厚労省は十月十八日から全国の食肉衛生検査所で、食肉処理される年間百三十万頭を対象にした全頭検査を開始。今月二十日までに約八万八千頭を検査した。

英国ではこれまで約十八万頭が狂牛病にかかり、被害は欧州などにも広がっている。国内では九月に千葉県内の乳牛一頭が初めて狂牛病と確認されたが、感染ルートは判明していない。

農水省は一頭目の発見まで、感染源とされる肉骨粉を牛に与えないよう指導してきたが、実際には各地で牛用飼料に使われていたことが判明。厚労省も今年五月から牛の精密検査を始めるなど、行政の不十分な対応が指摘されている。